

オルソリハビリテーション病院・臨床栄養部

谷本 真紀・氏原 久実・内山 里美

2023 年の概要

2022 年からの目標である、「①オルソ栄養士の質の維持・向上」、「②栄養食事指導の拡充」、「③食事サービスの向上」を引き続き掲げた。しかしながら、様々な取り組みを行う上で給食委託会社との連携は必須となる。限られた資源の中、目標に向かって進むには、まず栄養管理の基本である食事サービスの向上を図っていくことが最良の策と考えた。

はじめに、委託会社の業務負担箇所を見直すことから実施した。献立会議を再開し、様々な意見を出し合った結果、病棟の協力を得ながら食札の直置き運用を開始することとなった。毎食ごと、約 100 食分の食札ケースのふき取り、食札をケースに差し込む作業が省略され、約 1 時間/日の時間短縮となった。それにより仕込み時間が確保でき、一部の冷凍野菜を生の野菜へ変更することが実現した。昨今の食材料費の高騰のあおりを受け、圧迫していた食材料費の緩和に貢献できた。

病棟業務に関しては、他部署との円滑な連携を図るため、NST スクリーニングを文書作成からヤギー文章へ変更、入院時の食事箋の運用を廃止、また、系列外施設からの入院患者の手書き食事箋を病棟担当管理栄養士が作成することにした。他職種の栄養に関わる業務が簡便となり、負担軽減につながった。

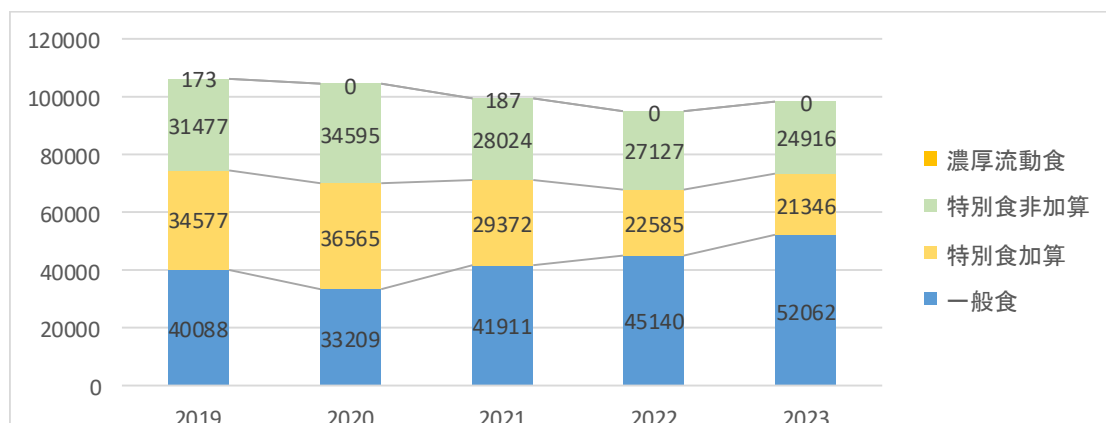
給食状況報告

給食提供数は年間食種別食数（表 1）の通りで、前年（2022 年：94,852 食）より 3,472 食増加した。特別食比率は 47.1%（2021 年：52.4%）と減少した。必要な方へ特別食の対応は行っていたが、高齢化が進み、食事摂取が進まない方などには、摂取量の確保のため、特別食を一時的に解除し、個々にあった食事を調整した。

表 1：給食状況報告

年間食種別食数 *延べ人数ではなく食数			
一般食	常食	45,731 食	46.5%
	学童食	145 食	0.1%
	軟食	6,179 食	6.3%
	流動食	7 食	0%
特別食	加算	21,346 食	21.8%
	非加算	24,916 食	25.3%
	濃厚流動食	0 食	0%
計		98,324 食	100.0%

図 1：給食状況報告



嗜好調査は前年と同様に、新型コロナウイルス感染予防を考慮し退院時アンケート（2022. 9. 1～2023. 8. 31）の『食事について』『栄養士からの説明』のデータを集計し、評価・考察を行った。

患者の男女比率は3：7とほぼ前年並み。特別食の内訳では高血圧食が52.7%、糖尿病食が27.7%と2食種で80%以上を占め、少数を特別減塩食、腎臓食、脂質異常食、その他の食種が占めた。

味付けは、前年38%→35%と「良い」の評価は下落、「悪い」が13%と前年（7%）より増加し、課題を残す結果となった。ボリュームについては「多い」との回答が35%と前年とは変わらず、主食量の個別調整を継続すると共に、副食の出来上がり量の適正化をより進め、過不足ない提供量での材料等の質向上を図る指標としたい。

栄養士からの食事説明では「理解できた」との評価が91%と昨年と同様であった。

栄養食事指導

栄養食事指導は、年間94件を実施した。加算、非加算ともに昨年より件数は減少した。特別食提供の減少と、算定要件である30分以上の指導は感染対策の点から時間を縮小、指導内容を簡略したことも要因の一つと考えられる。

外来指導は例年と同様に感染対策のため、運用を縮小していた。

表 2：栄養指導件数

入院指導	94 件	加算	12 件
		非加算	82 件
外来指導	0 件	加算	0 件
		非加算	0 件

人事

病院管理栄養士は昨年と同様、2名体制であった。

給食委託会社（aimサービス）スタッフに関しては、9月に栄養士の入れ替わりがあった。また感染症の影響により、調理師・パートスタッフの休職が相次いだ。一度だけ選択食の提供を休止せざるを得ない状況となったが、その他は給食サービスを低下させることなく対応してくださり感謝している。

表3：職員配置数(2023年12月時点)

職員配置数	
病院	管理栄養士 1.8名
委託会社	栄養士 1名
	調理師 2名
	調理員 6名

2024年の目標は、引き続き「①栄養管理業務の質の維持・向上」、「②栄養食事指導の拡充」、「③食事サービスの向上」の3本柱を掲げる。

2024年1月より地域包括ケア病棟へ移行され、内科患者の受け入れも始まる。それに伴い、様々な病態に合わせた食種が増えることが予想される。そして期限内での在宅復帰を滞りなく進めていく上で、多職種での連携が必要となる。また栄養食事指導対象者も増えることはもちろん、個々の能力、環境等に合わせた指導を行っていく必要がある。1月からの病棟編成の大きな変化に柔軟に対応していくためにも、栄養管理業務を今一度見直し、業務削減かつ質の向上に繋がるよう、引き続き精進していきたい。